

10 いじめについて考えましょう

「親は子どもの味方」というメッセージを伝えましょう

いじめは卑劣な行いです。いくら軽い遊びや悪ふざけ、ジョークのつもりでも、いじめられる側の痛み・痛みは時には死を覚悟するほど深刻なものです。

親は、子どもがいじめにあっているのではと感じたら、すぐに子どもと話し合しましょう。心の優しい子どもほど、いじめにあいやすく、誰にも悩みを打ち明けられないことがあります。日頃から子どもに対して、「必ず守ってあげるから、少しでも何かあったら話すように」と、言い続けましょう。また、子どもの示す小さな変化を見つけ、子どもの悩みや不安を受け止めてあげてください。

いじめは人間として 恥ずかしい行いであることを教えましょう

親は、わが子がいじめに加わったり、他人を差別し傷つけていることに気が付いたりしたときは、それが人間として恥ずかしい行いであることを教える責任があります。

その際、理屈を言うより、子どもを愛していること、弱いものをいじめたり差別したりしたことを知ってショックだったこと、人を傷つけたことに怒りを感じたことなど、親として本当の気持ちを伝える努力をしましょう。

まず、親自身が偏見をもたず、差別しない、許さないということを子どもに示していくことが大切です。



11 子どものよさを認めほめましょう

親は子どもに姿で示しましょう

親に感謝し思いやる心は、広く人を思いやる心のもととなる大切なものです。まず、親が自らの親である祖父母を大切にすることを、子どもに示しましょう。

大人は、その言動が子どもにとって大きな影響を与えるものであることを意識し、身近な家族に対して思いやる気持ちを具体的な姿で伝えましょう。



子どものよいところをその場でほめましょう

子どもが今後社会で生きていくときに必要なのは、自信と自分を大切に思う心です。これを「自己肯定感」と言います。これは植物の根のようなもので、広く深く張るほど、後に大きな実りをもたらします。

では、どうすれば「自己肯定感」は育つのでしょうか。それは、子どものよさをほめることです。日常生活の中で、その場その場で具体的な行為・行動について、周りの人からほめられることを通して、子どもは喜びを感じ自信や自己肯定感、自己有用感が育っていきます。逆に、体罰は脳の萎縮につながり、自己肯定感が育ちにくいといわれます。

小さなことから、子どものよさを認めていきましょう。



やさしさと 思いやりの 心を



新入学児をもつ保護者のためのてびき